

# さざなみ



移り行く  
人の慣らいを  
永久に変わらじ  
山寺の門  
偲ぶれど

石山寺

明治時代中期に撮影された古写真( 横浜開港資料館所蔵 )

滋賀医科大学附属図書館報

No.51

## 目 次

2003年 2月

オンラインジャーナルという風 .....	病理学第二講座 教授 小笠原一誠.....	2
シリーズ「本との出会い」(12)		
必然的に出会った2冊の本 .....	基礎看護学講座 助教授 任 和子.....	3
図書館探訪 ~ 和歌山県立医科大学附属図書館 ~ .....		4
時間外アルバイト学生からの寄稿.....		5
図書館の5年間をふりかえって.....		6
附属図書館利用講習会(報告) .....		7
本学関係者寄贈図書.....		8
表紙写真について.....		8

# オンラインジャーナルという風

病理学第2講座 教授 小笠原一誠



英文、特に英語論文の構成は「起承結」だそうである。すなわち、まずテーマを述べる（これからこういうことを書くぞということを示す）。次に、それに関することの説明や事実を述べる。最後に、結論（作者の意見）を述べる。この構成が、文章全体においてもまた一つの段落においてさえも貫かれているのである。従って、段落の最初の一文を読めば、その段落が何について書かれているかがわかる。そして、最後の一文を読めば、作者の意見や結論がわかることになる。時間がない時や読むのが面倒臭い時（どちらかと言うと大抵こちらの理由によるが）には、段落の最初と最後の文章を読むことにしている（浅読みと名付けている）。速く多くの論文を読むにはこの方法が良いが、残念ながら、実験に役立つインスピレーションはこの方法では得られない。その時は、仕方がないので深読み（普通に読むこと）をする。このことさえ念頭においておけば、状況に応じて英語論文の浅読みは十分に役立つと自分を騙して、日々の生活をかろうじてまっとうしている。

実は、以上が本日の前ふりである。この前ふりには2つの意図がある。一つは、これからテーマ、説明、結論の順番で話が進むことのお知らせである。もう一つは、スペース埋めである。（実は、こちらの方が私には重要なのだが）。内容の薄い文章を書く場合、よくこの手を使って学生時代はレポートを書いていたものである。学生の皆さんは、くれぐれもまねしないように。さてそろそろ紙面は埋まった所なので（この時点で約630字 / 1500字指定）、本題にはいりますか。

本日のお題は「読みたい雑誌がオンラインで読めない」である。最近、かなりの雑誌がオンラインで読めるようになってきた。部屋にいながら必要な論文のみをカラープリンターで打ち出し、ほぼオンタイムで論文が読めるのはとても快適である。コーヒーを飲みながら、午後の一時を論文を読んで優雅に過ごすことも可能となった。しかし読みはじめてものの5分後には口をあけて寝ている。午後からは昼寝をするのが生理的なのだそうで、この行為は生体リズムにあったことと諦めている。また、眠りを深くしないためにコーヒーを飲んでおくと、寝覚めがすっきりするのだそうである（また、脱線してしまった）。以上のように、優雅に論文を読めるようになったのだが、Science(23 329)やCell(29 219)といった雑誌がオンラインで読めない（括弧内はインパクトファクターを示している）。ついでながら、Immunity(18 866)やJournal of Experimental Medicine(JEM)(15 340)もオンラインで読めない。理由は簡単で、予算がないからである。オンライン契約するとかなりの金額が必要となる。当然、冊子体はそれよりは安いので、図書館は冊子体を購入することになる。図書館に行ってそれをコピーすればいいのだが、発行されてから3週間後に届くので、この遅れはつらい。ひと昔前ならこんなものかと思っていたのだが、今では論文の題名とabstractだけは発行したその日にすぐ読めてしまうので、詳しい内容がわからず、生殺し状態が続くことになる。

社会の流れからすると、すぐに電子図書館の時代になると思われる。本学の図書館の所蔵している本が貧弱であるとの意味ではないが、幸か不幸か本学では歴史のある大学のように貴重な本が足かせとなるほど山のようにあるわけではない。それ故、以外と簡単に電子図書館に移行できるのではないかと考えられる。その手始めとして、せめて有名雑誌（ScienceやCell）はすべてオンラインで読めるようにしていただきたい。ついでにImmunityやJEMもオンライン契約していただくと望外の幸せである。時代の風を読み取ることの巧みな船長に心よりお願いする次第である。

（おがさわら かずまさ）

## シリーズ「本との出会い」(12)

## 必然的に出会った2冊の本

基礎看護学講座 助教授 任 和子



糖尿病患者に療養指導をする場面で、「太く短く生きる」、「今は自分の身体より大事なことがある」、「どうでもいいねん」と患者に言われることがある。このような状況は、血糖コントロールが悪く、合併症があらわれ始めた患者を前にして、医療者が「このままではいけない、なんとかしなければ」と意気込んで、病気のしくみや合併症の怖さをしつこく説明した後に起こることが多い。情報提供をすることによって療養に取り組む意欲が上がる場合もあるが、むしろ患者との距離が遠のくこともある。

では、患者にどのように向き合えばよいのか。ナースであるD.R.ファルヴォの『上手な患者教育の方法』は、それを私に具体的に指南してくれた。ここには、患者のアドヒアランスに、医療者自身の行動が大きく関与するということが明確に書かれており、臨床技能を高めるための方法が具体的に説明されている。

私はこの本を、日本語版が出版された1992年にすぐ買った。大学生協の新着コーナーをながめていると、この本の背表紙にある「患者教育」というタイトルが目飛び込んできたので、思わず手にとった。「本書では生物医学的な知識を伝えるのみでは患者教育は不十分であり、まず患者の考え、希望、その時最も気にかけていることなどを明らかにした上で教育を開始すべきであると主張している」という訳者の序に惹かれ、購入した。

その後、勤労者を対象にした外来での糖尿病個別療養指導に携わる機会を得た。そこでは、血糖上昇のメカニズムについて十分な理解をした上で、患者自身でライフスタイル変容の目標を立てることができるように患者を支援した。しかし、短い面接時間でそれを支援することは難しく、時には患者の自己決定を待てずに、な

かば強制的に目標を提示してしまうこともあった。そんなとき、出張先の大学書店で、人の姿がブルーとピンクのグラデーションとともに変化する装幀に魅せられて、S・ロルニックの『Health Behavior Change A Guide for Practitioner』を手にした。この本は、数多くある行動変容の理論を整理し、実践で使えるように橋渡しをするものであった。ラッキーなことに、翌年には『健康のための行動変容』というタイトルで翻訳が出た。この本には「個人が変容について話し、考える自由を最大限に引き出せるような会話を構成する方法」が示されていた。この本によって私は、行動変容に対する患者の動機づけが高まることを、積極的に待つ勇気を得た。

これらの本は、現実の混沌とした問題を解くための方程式を私に提示してくれた。それらは、患者にどのようにかかわるかを判断する時に、迷い揺れる自分を支えるものの一つとなっている。本との出会いは、偶然にやってくるように見える。しかし、必然性があるからこそ、目の前にあらわれるものなのかもしれない。

(にん かずこ)



2001年8月に生まれた娘。義妹の田中洋子画。



## ～和歌山県立医科大学附属図書館～



JR和歌山駅からきのくに線を南へ2駅、紀三井寺駅からバスで走ること8分、近代的なキャンパスが視界にあらわれます。平成10年に移転したこのキャンパス内で、和歌川のほとりに立つ3階建ての建物が図書館です。建物は複合施設で、2階部分までが図書館、3階は生涯研修地域医療センターとなっており、3階のセンターは講習会・講演会等で活用されています。地域へのサービスという点では、和歌山県立医科大学附属図書館は、和歌山県内の図書館の蔵書情報と図書の貸出・配送サービスを提供する「和歌山地域コンソーシアム」の参加館となっています。このコンソーシアムは、館種をこえて地域の利用者に地域社会や生涯学習の支援を行なうために運営されています。



さて図書館の入館ゲートを通ると、2階までの吹き抜けのホールが広がり、右手は全面が窓、正面は2階へと続く階段となっており、明るく広々とした空間に迎えられます。その階段の手前には、右手にちょっと立ち止まって読みたくなるような雑誌や図書のブラウジングコーナー、左手には新着図書の展示があり、通りがかりに新しく入れた図書のチェックができます。2階は雑誌のフロアとなっており、書架の見出しが目の高さの位置に来るようなといった気配りが見られます。館内の床には目にやさしい落ち着いた緑系の絨毯がしきつめられ、書架の側壁や新着雑誌の棚は、ぬくもりを感じる木製のものが使用されています。

また図書館ホームページは、学内限定となっているので、残念ながら学外からは見ることはできませんが、利用者が文献複写の申込ができるサービスや、Cell、Scienceといった主要な雑誌の電子ジャーナルが提供されています。利用者への心づかいを感じる心地よい空間づくりやサービスを提供されている和歌山県立医科大学附属図書館を一度訪れてみてはいかがでしょうか。



<http://www.wakayama-med.ac.jp/> 和歌山県立医科大学

<http://www.lib.wakayama-u.ac.jp/renkei/con.html> 和歌山地域コンソーシアム図書館

## 図書館アルバイト学生より

### 旅

医学科4年生 松井 善典



昔から図書館の空気が好きだった。ふらふらと旅をする様に、その独特の香りと、どこか張り詰めた雰囲気の中、本の世界を旅する。時の流れも、今いる場所も忘れて。僕にとって図書館は自分というものを育む大切な場所である。思い出せば、まだ学生服を着ていた頃、長編小説に挑戦したり、新書を読み漁ったり、受験勉強に励んだり、自分と向き合う大切な空間であった。そして、片手に余る一冊の大きな世界を旅することで、体験として自分の中に何かが築かれていくことが楽しかった。読書も一つの体験だと感じた。

今日の自分はどうか。医学書、いわゆるQ -、W -、と分類されている本しか読んでいない。多くの利用者がそうであるように、自分もまた図書館を狭く利用してしまっている。読書という体験がいつの間にか乏しくなっていた。

医師として、多くの専門書を読むことは必要である。しかし、多くの人と出会う中、何気ない読書で得た言葉や世界で、その人との距離を縮めることがある。まるで同郷の人との話が弾むように。本一冊の旅は、その人の心の故郷に行くことに似ている。例えば患者さんとそんな関係が築けたら、少しは患者さんの緊張や、不安を取り除くことに繋がるのではないか。

人生という旅の中で人と出会うことと同じ様に、図書館の中で本と出会うことは、自分とその未来までも変える大切な体験になる。そう思い起こしてQ -、W -、以外も借りてみようと思う。

皆さんも、いつもは見向きもしない角を曲がって旅してみてもはどうでしょうか。

## 本学図書館について

医学科3年生 伊藤 隆洋



私は再受験生であるので長年大学図書館を利用しています。本学の図書館は図書の貸し出しを延滞しても新規貸し出しの禁止以外に特にペナルティーを与えられない点については他の大学図書館と比較すると驚くべき点です。これは規則の遵守が利用者のモラルに任されているためだと思います。こういった基本的に学生を信じる図書館側の態度は図書館の無人24時間利用にもあらわれています。自動貸出返却装置の設置は24時間体制の利便性向上を援護するものであり、また本学図書館の特徴であるマルチメディアセンターと図書館の統合により、“情報を得る”という利用者の目的の達成度が飛躍的に向上しています。多くの学生はこれら利点を良く理解し、図書館を有効に活用していると思います。このような図書館サービス提供の出所となっているものは本学が単科大学で小回りのきいた改善が幾度と行われてきた成果でしょう。

大学図書館には情報収集以外の側面として勉強する場所という意義を見出している学生が大勢います。地域の図書館には残念ながら自習を禁止する所も多くあるようです。その中で大学図書館は自習しても注意されないし、静かで集中できる場所であり資料も豊富で勉強しやすい環境になっています。自宅での勉強と違って図書館での勉強は気合が入ると学生は感じています。本学は医学部なので必要な勉強量は膨大であるし、無事卒業のためには勉強せざるを得ないので、学生にとって図書館の意義は大変に大きい。本学図書館は学生必需の施設となっており、また図書館の学生の要望にかみ合った高質のサービスを提供するという環境は学生にとって至福であると思います。

私が図書館でのアルバイトを希望したのは図書館の落ち着いた雰囲気が好きで、こんなところで仕事がしたいと思ったからでした。にわかに話題になっている大学統合の影響で本学図書館がどうなっていくのか気になるところですが、できれば今の落ち着いた雰囲気のまま卒業まであってほしいというのが学生の気持ちでしょう。



# 図書館の5年間をふりかえって

～「コラボレーションセンター」とともに～

図書課長 伴 美子

平成10年4月本学附属図書館に赴任して早や5年の月日が流れました。私にとってのこの5年間は、図書館という静寂な響きを感じさせる言葉とは裏腹に、現実にはアクティブな職場環境の中に身を置き、様々な体験をさせてもらった充実感のある5年間だったように思います。

この5年間で図書館長には4名の先生が順次就任されたことも、専門分野の異なる（解剖学・消化器外科・循環器内科・眼科）先生だったので、夫々の特色をお持ちで楽しかった思い出があります。

## <平成10年度「コラボレーションセンター」増設の補正予算がつく>

私が着任してすぐの5月のこと、事務局長から「図書館・マルチメディアセンターの統合建物」増設のための補正予算がついたとの報告を受け、やおら忙しくなりました。国立医科大学では初めての図書館と情報系施設との統合建物ということで、設計面の基本方針や設計内容について図書課・図書館委員会・施設課など関係者の方々と頻りに検討を重ね、キャッチボールをしながらの作成作業が続きました。とにかく利用者にとっての快適な環境整備に重点を置き、中でも身障者にもやさしい設計（広い廊下・エレベータ周辺・車椅子対応の出入口等）を考慮に入れました。何とか設計図にこぎつけ、関連する諸業務も進み、翌年早々から着工という運びとなり、利用者の方々にはご不自由をおかけしながら平成11年秋まで工事が続きました。

## <平成11年1月から、学部学生を主とするマナー悪化のため、無人開館時における学部学生の利用停止にふみ切る>

当時は「時間外特別利用」（夜間・休日の入館利用）の対象を教職員はじめ学部学生にまで拡大していましたが、日常的に無人開館時における利用マナーが学部学生を主として悪化の一途をたどり、例えば、館内での飲食・雑談、窓からの出入り、玄関ドアのこじ開け（衝立ての挟み込みによる）等、目に余ることが頻繁となり、教職員等からの苦情が寄せられ、遂に図書館委員会で議論の末、学部学生には無人開館時の入館は停止することを決定しました。

その後、高学年とくに臨床実習や国試を控えた5・6年生から、利用マナーを改め、信頼関係を損なうような行為はしない等の決意のもとで、時間外利用を認めてほしいとの要望が出され、図書館委員会で慎重に審議の結果、「医学科5・6年生と看護学科4年生で、利用登録を行い、事前にオリエンテーションを受けた者に限って時間外利用を認める」とし、平成11年12月15日から実施されました。（なお、平成14年8月からは、医学科4年生についても認められた。）

これら一連の対応措置から教訓めいたこととして感じたのは、図書館は利用者に学習の場を提供する役割を担っているが、さらに利用者が快適かつ効果的に勉学できる環境を維持しなければならないこと、そのためには、利用者が利用マナーを守り、お互いに迷惑を及ぼさないよう配慮するという自覚を促す必要があるといった点です。利用マナーが無視されるような状況に立ち至った場合は、図書館として毅然とした姿勢を示し、管理の及ばない無人開館時には利用を停止することも辞さないという措置をとることもやむを得ないし、真面目に利用したい人達の立場に立って、より良い利用環境を維持することも図書館の大事な使命と考えます。

## <学外臨床実習協力病院の職員および患者さんへの利用拡大へ>

本学では学部学生の臨床実習の一環として、学外の病院にも臨床実習指導をお願いしていますが、これらの協力病院の職員の方々にも本学の教職員と同様の利用をして頂く措置をとり、平成12年から利用者登録制の形で実施を開始しました。以来、毎年90余名の方が登録され、利用されています。

また、インフォームド・コンセントという趣旨からも、本院の患者さんに対しては平日の時間帯に

限ってですが、閲覧利用をして頂くことも開始しました。なお、入館の際には主治医による「図書館利用許可証」を携帯して頂くことにしています。むろん病衣のままでも差し支えなしとしています。

#### <建物は竣工しても、残された課題が・・・>

平成11年10月めでたく「コラボレーションセンター」は竣工しました。しかしながら、建物内部の設備が不十分で、電動集密書架室は増設されても肝心の書架は設置できず、閲覧室内のリニューアル等々が未整備のまま取り残されました。これらは予算との相談ですから、関係部署の方々に粘り強くお願いし続けた結果、年度ごとに実現の陽の目を見ることとなりました。

#### <図書資料の整備・電子ジャーナル導入等、学術情報提供の充実にむけて>

本学に限らず、医学系図書館が優先すべき収集資料は外国雑誌と電子媒体資料です。とくに欧米における最新医学情報の収集は不可欠であり、外国雑誌については資料購入費の2/3を充当していますが、年々の円安と価格高騰により購読数を削減してきたという深刻な状況があります。現在の冊子体購読数は約250誌ですが、今後も予算が増えない限り、削減せざるを得ないでしょう。一方、電子ジャーナルの導入については、平成14年度から文部科学省の予算配分の措置により、学内LANを介しての提供(約1100誌)を開始しましたが、この予算配分も3年間の保障しかないということで、それ以後は学内経費で契約しなければならず、かと言って電子ジャーナルを切るわけにもゆかず、先行き頭の痛い話です。

学生用図書についても深刻です。平成14年度からは文部科学省の予算配分が半減され、これではまともに整備することもできず、学内経費からの補填をお願いし、何とか最低限の購入整備を行っているところです。学生の皆さんには図書館を日常の学習の場として活用して頂きたいのですが、「新しい本が少ない」という苦情をよく耳にする度に辛い気持ちになります。グチってしまいましたが、いかに図書資料の整備充実を図るかは、図書館の存在意義への評価にも関わってきます。これからも頑張るしかないでしょう。

電子媒体情報のうち、各種データベース(CD-ROM版)を導入し、これも学内LANを介して提供しています。とくにEBMRの導入に際しては経費が相当かかるので、学内の関係部署に要望し、平成13年から提供スタートにこぎつけました。ただ現在のところEBMRの活用が広範囲の研究者に及んでいないことは残念ですが、より多くの方々にアクセスして頂き、研究・診療・教育に役立てて頂くことを願っています。

(ばん よしこ)

### 附属図書館利用講習会(報告) (平成14年8月～平成15年1月)

- 10月22日 看護学科第3学年文献検索ガイダンス
- 11月15日 看護学科第3学年文献検索ガイダンス
- 1月7日 看護学科第3学年文献検索ガイダンス
- 1月22日 Science Directユーザー講習会(入門/初級コース)





## 寄贈図書紹介

JAPF平成13年度研究報告集	三原医学社	2002	上島弘嗣教授(福祉保健)	
新臨床内科学 第8版(全3冊)	医学書院	2002	吉川隆一学長	
内科学書 改訂第6版(全2冊)	中山書店	2002	吉川隆一学長	部分執筆
糖尿病の療養指導 2002	診断と治療社	2002	吉川隆一学長	部分執筆
甲状腺疾患治療マニュアル	南江堂	2002	吉川隆一学長	
コア・カリキュラム対応医学一般	金芳堂	2002	吉川隆一学長	
高齢期の健康科学	メディカ出版	2001	今本喜久子教授(基礎看護)	監 訳
名画と痛み	南江堂	2002	横田敏勝名誉教授	
動脈硬化性疾患診療ガイドライン 2002年版	日本動脈硬化学会	2002	柏木厚典教授(内科学第三)	
別冊プラクティス 糖尿病と動脈 硬化・高脂血症・高血圧	医歯薬出版	2002	柏木厚典教授(内科学第三)	
ビューティフル・マインド	新潮社	2002	高橋三郎名誉教授	
SEIYO'S CAMERA EYE -佐野晴洋写真集(全2冊)-		2002	佐野晴洋元学長	撮 影
破壊の女神 /他23冊	新書館	1996	伴美子図書課長	



## 表紙写真について

この写真は、明治中期に外国人観光客向けの「おみやげ写真帳」として売られていた写真の一部で、モノクロ写真に職人が手作業で色づけしてカラー写真のように作製したものである。

場所は石山寺の門前で、人力車が3台、手前の休憩所とおぼしき所に車夫が数人と赤い袈裟をかけた僧侶のような人物が写っている。殆どの人物がこちらを見ており、ヤラセの雰囲気が見てとれる。断髪令が公布されたのは明治4年。それからまげを切る人達が徐々に増え、「ざんざり頭をたたいてみれば、文明開化の音がする。」と唄われるようになる。この写真の人物はいずれも断髪しており、しかも人力車もあるから、明治中期以後に撮影したものであろう。